

開発協力の 現場から

融資担当、同じ釜のメシを喰う



千谷 みのり (JICA パナマ事務所 次長)

本稿では、「開発協力の現場」のひとつである円借款についてご紹介したい。円借款は、国際協力機構（JICA）が実施する政府開発援助（ODA）のスキームのひとつで、途上国の政府や公的機関に対して譲許的な条件で融資を行い、その国の公共事業の実施や財政改善への支援を通じて持続的な開発を後押しするものである。

途上国への「融資」と聞くと、あまり馴染みがないかもしれないが、ラテンアメリカ諸国の人々の、より豊かな生活基盤づくりを支える大事な開発協力のひとつであり、これまで、日本は「円借款」を通じて発電所や道路・橋の建設、上下水道整備や環境改善事業などを支援し、この地域の社会経済発展を支えてきた。円借款は、ただ相手国へお金を貸すだけでなく、案件を作るところから完成後まで相手国と寄り添い、「どうしたらより高い開発効果を届けられるか」を一緒に考えながら協力し、その長い付き合いを通じて日本との信頼関係を深めていこうとするものもある。

筆者は、大学で教育学を専攻し、教育の改善を通じて途上国の人々のよりよい明日に貢献したいという思いで開発協力の仕事を目指していた。就職してみたら、発電事業に融資をしたり、地すべり対策や橋の改修を無償資金協力で支援したり、技術協力で地方自治体による廃棄物管理のしくみづくりを支援するなど、想像を超える展開ばかりだ。そんな筆者が特に「円借款」の醍醐味を感じるのは、比較的大きな公共事業への支援を通じて、国のマクロ経済状況をはじめ、各開発課題の優先度、事業の計画や目指す開発効果などを相手国と議論しながら、その国

や地域の人々の生活の基盤づくりと一緒に取り組めることである。「円借款」の現場に限らず、大事にしたいのは相手国や関係者と「同じ釜のメシを喰う」こと。関係者の話をよく聞き、日本として何ができるか考え、喜怒哀楽とともにしながら、その国や地域の人々、地球環境のよりよい明日をともに創っていく。

比較的所得が高い地域といわれるラテンアメリカでも、例えば、安全に管理された飲み水を利用できるのは人口の約75%にとどまり、地方部では約53%と約半数となっている。また、安全な衛生施設（トイレ）を利用できる人は全体の約49%と半数を下回る状況にある（WHO/UNICEP Joint Monitoring Programme, 2022）。筆者も、2019年にパラグアイ東部のシウダ・デル・エステ市へ出張した際、近隣の住民が庭にあるいわゆる「ボットン便所」を利用しておらず、生活水はその近くに掘った井戸を利用するため大腸菌等による汚染も度々あると聞き、想像以上の困難な現状や都市部との格差に衝撃を受けた。国や自治体による下水の処理や廃棄物の管理も、充分にできているとは言い難い。また、ラテンアメリカ諸国は度々災害に見舞われ、その度に人的・経済的被害が発生し、その影響で都市部や外国への人口流出も起きる。人々が安心し、安定した暮らしを営んでいくためには防災も重要な課題で、こうしたラテンアメリカ諸国の課題をみていくと、日本の都市化や気候変動対策との共通性もみえてくる。これらの課題をともに解決していく円借款の現場がどのようなものか、筆者の経験も交えてご紹介したい。

まず、円借款のプロジェクトはどのように始まる

のか。実は、決まった始まり方ではなく、すでに実施している協力をきっかけに相手国から相談を受けたり、地方配属の協力隊員から劣悪な社会インフラの状況を聞いて視に行ったり、米州開発銀行（IDB）をはじめとするパートナーが「このプロジェクトと一緒に取り組まないか」と声を掛けてくださることもあり、円借款が始まるきっかけは様々だ。

筆者はある時、コスタリカ電力公社（ICE）が実施する「ピリス水力発電所建設事業」（2001年調印／約166億円を円借款で支援）のモニタリングのために、先輩とコスタリカへ出張した。会議が終わってホッとしたところで、カウンターパートのセルヒオ氏が、「今後の話だが、JICAは地熱発電に興味はないか？ グアナカステという地域に…」と言いかけた。すると隣にいた先輩は、セルヒオが話し終わるのも待たない勢いで、「Si, Si, Si! ¡Ella es la encargada!（やろう、やろう、彼女が担当だ！）」と私を指さして答えていた。水力発電のしくみやタービンの種類を勉強したばかりだった筆者は、「へオ…へオテルミア（地熱）?!」と新たな展開に目が点になったが、嬉しそうに握手を求めるセルヒオ氏の手を、いつの間にかガッチリ握り返していた。（注：この場で融資を約束するわけではなく、ここからプロジェクトが始まるまでは約2年の準備期間がある。）筆者にとってはこれが奥深い地熱の世界への第一歩、そして終電時刻を超えて地熱の父・故マイニエリ氏と長電話をする日々の始まりだった。この時、融資を行ったラス・パイラスII地熱発電所は2019年7月に完成し、今もコスタリ

カや中米諸国のグリーンな経済発展を支えている。

ちなみに、セルヒオ氏は対外折衝を担当する人物（当時）であり、会議の冒頭には「○○サンや△△サンは元気にしてるか」と数々の日本人の名前を挙げ、近況を聞いていた。長い付き合いの中で「次の案件も日本とやりたい。円借款をお願いしたい」と思ってもらっていることを実感した。この関係は、「ミラバジエス地熱発電事業」（1985年調印）から長く続く日本人とICEの協働の賜物であり、大切なバトンは今も受け継がれている。

さて、円借款事業は息が長い。上述のようなきっかけから、事業の完成までは大体7～10年を要する。この長い付き合いが本格的に始まる「審査」について、少しご紹介したい。

円借款事業では、一般的な融資と同じように「審査」というプロセスがある。相手国のマクロ経済状況や事業の実施に当たってのリスクなど、様々な点の情報収集と分析を行い、融資額などを検討する。これに先立って、多くの場合はまず「協力準備調査」という調査を行い、スペシャリストのチーム（コンサルタント）に情報をまとめていただく。実はこの「協力準備調査」の段階から日本の支援は始まっており、筆者は出張した先で、相手国の技術者から「協力準備調査では、事業計画にかかる情報の整理や分析の過程でいろいろなことを考えさせられ、時にはコンサルタントの方々から日本のやり方を教えていただき、とても勉強になった」「我々は自分たちがまとめた調査で充分だと思っていたが、公共事業を実施す



写真1 技術協力プロジェクトの一環で、2020年10月に発生したハリケーン・イータ、イオタの被害とその後の状況、さらに水路などの洪水対策インフラの現状を調査（ホンジュラス北部、2022年）。技術協力の後に円借款による支援を行う可能性も考えながら、日本の強みを活かした中長期的な協力をイメージする（JICA提供）



写真2 無償資金協力で建設されたホンジュラスの「コマヤグア給水システム改善・拡張事業」（2020年完成）。コマヤグアは2021年に国際空港ができ関連投資の増加が期待されるが、それを支える社会インフラの整備が課題。過去の協力を通じて日本へ信頼を寄せる相手国の機関とは、事業完成後も関係を継続し、時には食事をともにしながら、政治経済状況やセクターの最新情報について意見交換する。対話を通じ、他の自治体との共通課題や円借款事業を実施する上で役立つ視点が得られることがある（JICA提供）

るにはもっと緻密な準備が必要であることがよく分かった。このスタンダードはできるだけ国内でもアプライしていきたい」と言わされたことがある。こうした調査段階から、日本人が相手と「同じ釜のメシを喰い」ながら、現場で開発課題の解決に向き合っているのだ。

調査を終えると本格的に「審査」に入るが、ここではJICA職員が2週間ほど現地に滞在し、相手国の財務省や実施機関、環境省他と事業計画や融資額(案)について議論していく。朝から晩まで机を囲み、時にはエンパナーダやバレアーダを頬張りながら、時にはテレレの飲み方を教わりながら、ひとつひとつの項目について念入りに確認し、円借款事業の形を整えていく。実はこの時、相手国の関係者同士の合意形成も重要であり、いつ、誰が、どのような手続きや判断を行うのかなど、相手国の関係者間でも議論が白熱することがある。JICAの問い合わせを通じて、より具体的に自分や関係者の責任範囲を理解し、チーム体制が強化され、共通のビジョンと歩むべき道のりが明確になっていくのである。審査では、JICA職員が対話をリードし、関係者の表情や話し方にも注意しながら、納得がいくまで、時には夜中まで徹底的に議論を尽くす。まるで部活の夏合宿のようだが、2週間みっちり「同じ釜のメシを喰った」相手とは結束力も高まり、チームのバトンは案件実施段階に受け継がれていく。

このバトンが受け継がれていく中で重要な役割を担うのが、JICAの現地スタッフだ。彼らは自国の政

治経済状況、該当セクターの関係者や最新状況を熟知しており、相手国と日本人の間の潤滑油としても、重要な役割を果たす。彼らの活躍は、スムーズな案件実施に不可欠であり、彼らも、子や孫の代まで返済が続く円借款事業の開発効果が高いものとなるよう一生懸命に取り組んでいる。

さて、案件形成のあとは事業実施段階に入っていく。先述のとおり、JICAは資金提供するだけでなく、より速くよりよい開発効果が発現するよう相手国と伴走する。融資を実行するだけでなく、関係者に寄り添い、相談があれば膝を突き合わせ、問題が起きそうな場合の回避策や、起きた後の対応や再発防止策をともに考える。円借款事業では特に工事業者を調達する段階や、工事中に様々なことが起きる他、事業を取り巻く社会経済状況が変化し、プロジェクトが影響を受けることもある。

例えば、国際情勢の変化によって工事に必要な資機材の価格が高騰したり、自然災害によって事業の進捗が遅れ事業費が増加したり、地方部での事業実施にあたって想定していなかった困難が生じたり、時には予想外のことも起きる。資金面でのリスクに対しても、ある程度の「予備費」を想定しておくが、それでも想定を超える状況下では、相手国が国家予算から資金を確保したり、他のドナーへ協力を依頼するなどして資金調達をすることになる。日ごろの情報収集や過去の教訓から学ぶことによって問題の発生を防ぎながら、JICAの職員は現地スタッフとともに都度、相手と対応策を検討し解決を促していく。



写真3 パラグアイの円借款「東部輸出回廊整備事業」(2022年10月完成)では、同国東部の穀倉地帯に約144kmの輸出回廊を整備した。交通の安全性を確保する橋の建設もその一部である(2018年8月頃、執筆者撮影)



写真4 グアテマラ・シティから約300km(車で約7時間半)のキチエ県サキシュペックにて。インフラ大臣(当時)と、サキシュペックの住民やコントラクターと事業進捗を協議したあと、マヤのごちそう「カキック」(七面鳥のスープ)をいただいた。住民から話を聞くと、電気はソーラーパネル、水は近隣の川から引き、料理には薪を使う生活で、多くの若者がアメリカへ移民として流出しているという。円借款事業「和平地域道路整備事業」が完成すれば、病院への移動や農産物の運搬時間が短縮される他、電力・医療をはじめとする社会サービスが山間部へ拡大する、と住民からも日本の協力への感謝と非常に強い期待が寄せられた(JICA提供)

時には、現地スタッフとともに相手機関を訪問し、上の階から下の階まで情報収集をして回ったり、調整役となって組織内のコミュニケーションを促したりする。時には、秘書の方とたわいない話をしながら、責任者の帰りを待つこともある（これも貴重な情報収集の時間だ）。困難な場面でも、こちらから足を運んで対話を続けることが、円借款事業の成功においてとても重要な要素である。

以上で、開発協力の現場のひとつである「円借款」の紹介をさせていただいた。

現場に足を運び、関係者と向き合いながら考え方動するのが「信頼で世界を繋ぐ」JICAの開発協力の現場であるが、各々の現場に喜怒哀楽があり、成功もあれば失敗もある。筆者には言い表せない現場関

係者のご苦労も多々あり、ここで表現しきれない部分をお詫びしたい。また、日本政府の方々には案件形成から完成後まで多大なご指導やご支援をいただいており、ここに感謝を記したい。

「円借款」はいわば伝統的な開発協力の手法であり、この手法では解決が難しい課題もある。今、JICAでは「共創と革新」を掲げ、新たなパートナーや手法を試行しているが、伝統的な開発協力を通じて培ってきたラテンアメリカ諸国との信頼関係も維持し、関係を発展させながら、今後も日本とラテンアメリカにとって良い協力をていきたいと思う。

（ちたに みのり 国際協力機構 [JICA] パナマ事務所 次長）



『ラテンアメリカ文学の出版文化史 —作家・出版社・文芸雑誌と国際的文学ネットワークの形成』

寺尾 隆吉編著 勉誠社

2024年5月 307頁 5,500円+税 ISBN978-4-585-39040-4

ラテンアメリカ文学は世界中で、日本でも幾度ものブームを含め人気は根強いものがある。カブリエル・ガルシア・マルケス『百年の孤独』、ホルヘ・ルイス・ボルヘス『伝奇集』、ファン・ルルフォ『ペドロ・巴拉モ』、フリオ・コルタサル『石蹴り遊び』、バルガス=ジョサ『緑の家』はじめ枚挙に暇がない文学史に遺る名作群は未だに広く読み継がれている。本書は現代ラテンアメリカ小説を専門とし訳書も多い著者（早稲田大学教授）と6人の研究者が「20世紀のラテンアメリカにおける文学出版事業」（寺尾）、国際的文学ネットワークの形成については「出版黎明期のアルゼンチンとボルヘスの創作」（寺尾）、「文芸誌『スール』とラテンアメリカ文学」（大西亮 法政大学教授）、「ウルグアイ出版産業の展開」（浜田和範 慶應義塾大学専任講師）、「ファン・ルルフォ作品がカノンになるまで—1940・50年代の雑誌を中心に」（仁平ひとみ 京都産業大学准教授）、「コスモポリタンなラテンアメリカ文学と文芸誌・出版社」（藤井健太郎 東京大学院博士課程、日本学術振興会特別研究員）、「ペネズエラと『ラテンアメリカ文学のブーム』—受容、出版社、論争」（Gregory Zambrano 東京大学特任准教授、栗原祐紀子 東京大学博士課程）、「スマメリカナ社の出版戦略とラテンアメリカ文学のブーム—『石蹴り遊び』と『百年の孤独』の刊行」（寺尾）の論考に、ラテンアメリカ文学出版関連年表と人名、事項・新聞・雑誌、書籍から引ける索引を付している。ラテンアメリカ文学が国際的に認識されていく過程、文学史に名を遺す作家の作品の刊行、宣伝の経緯、各国の出版事情や書籍・雑誌の流通、編集者や出版社の役割を考察した研究書。

（桜井 敏浩）